

安田章生

歌集
旅人の耳

彌生書房刊

歌集 旅人の耳

白珠叢書 第75篇

印 刷 昭 和 五 十 三 年 五 月 一 日
発 行 昭 和 五 十 三 年 五 月 十 日
著 者 安 田 章
発 行 津 曲 篤
印 刷 猪 瀬 印 刷 株 式 会 社
製 本 大 口 製 本 印 刷 株 式 会 社
発 行 東 京 都 新 宿 区 中 町 十 八 番 地
株 式 会 社 彌 生 書 房

©1978 0092-78050-8525

目

次

ただ一囊を

三

鳥よりも早く

三

雪の音

四

日に千たび

五

遊行のころ

一〇一

命の艶

一三七

なほはるけく

一四〇

千草万木

一四三

行き行きて

一七

ねもころに

一五

まぎれなく

三三

花中樹上

二四

歌人の印象

司馬遼太郎

二五

あとがき

二六

旅人の耳

ただ一囊を

昭和四十一年（一九六六）作

よろこびがそこにあるかためらはず行きけり一つの道を選びて

わが心に満ちきてやがて溢れなむもの待つおもひにひとり坐れる

心ゆたけき闇の夜^よがあり目に見えぬ光そそぎてゐるかとおもふ

かの高原^{かうげん}にわが立ちしとき天^{あめ}なるや光は遠く額^{ぬか}を照らせり

ひかり澄む日はことに親しきわが影の一足ひとあしごとにわれに従つきくる

ゆつくりと歩み行くべくわが影と繰り返すなり無言の対話

瓢湖にて 十一首

かりそめの旅の一日にわが見しか海越えて遊ぶ鳥のいのちを

北の海越えきていのち養ふとこのしづかなる白鳥はくでうの群れ

しづかにはげしき生^{せい}をおもへり北の海越えきて命やしなふ鳥の

浮かぶともなく安けさの浮かびをり白鳥群るる湖の朝

白鳥の群るるそのとき湖に映ると見えて光る雪山

飛び立つと朝の光に羽ばたくやよろこび溢る白き大き羽

白鳥のゆたけき胸が分けてゆく湖のうへの薄ら冬の陽

時のまに移りてゆけり水のうへを群れ飛ぶ鴨の影は落ちつつ

すでにして夜となりしかば白鳥の影まぎれゆく湖の奥

ただ暗く雪降る日にも白鳥のいのち呼び合ふ声ひびくべし

真菰原に日暮れをひそむ鴨の群れの限りも知らず命しづけし

野を遠く沈黙流れ榛の木に鳴かぬ鴉も夕映のなか

ひとひらの雲もあらねど雪山の髪影ふかき日暮れとなりぬ

ふりさけてながく目守りつ雪山の光にむかひ飛びゆく一羽

野の空に春の朝けを透るときよろこび満ちて雲雀は鳴けり

救ひがたき心ひとつを投げうてと声澄む雲雀は春の野の空

その性の拙きを春の日にさらしくちなはゆゑにものいはずけり

いのち深く萌ゆる大樹の幹に寄りて春の落葉の音をこそ聴け

春の日を石重くあり鳥のこゑ光となりて透れるものを

さらにしづかに時間^{とき}移るなり杉の秀^はを超えてはるかに行く雲よりも

春されば思ひは遠くきらめきて細き流れとなりて野を走る

道の辺の草にすがれる蟬の羽の透明にしてものうし春は

たのしくも心せはしきよ四十雀しじふからの枝うつり鳴く朝なりければ

春の水あつまり流れゆくときのためらひもなき心となりぬ

ゆたかなる光のごときかなしみをおもふ心に春の河逝く

豊後竹田にて 十首

吹き過ぐる風が落してゆくほどの影ある真昼の春の城址